

チリと日本の義務教育制度と算数教育の比較

前サンチャゴ日本人学校教諭

静岡県沼津市立今沢小学校教諭 井出 雄大

キーワード：在外教育施設、サンチャゴ、義務教育制度、算数教育

1. はじめに

昨年度まで3年間チリのサンチャゴ日本人学校で教鞭をとらせていただいた。その中で、チリと日本の教育制度・義務教育の比較と算数の教科書や学習の比較を行い、それぞれの良さを考えた。さらに、そこから日本における学校教育に生かしていけることはないかと考え、それを以下にまとめた。

2. 日本とチリの教育制度の違いについて

(1) 学校の種類について

日本において、幼稚園から大学まで公立校と私立校の2つに分かれる。公立校と私立校では、運営の仕方・授業料等の違いがある。チリにおいては、幼稚園から大学まで公立校と私立校、公立・私立のミックス校の3つに分かれる。各学校で、以下のような共通点と相違点がある。

	公立校	私立校	公立・私立ミックス校
運営方法 授業料	国が運営をしている。そのため、授業料は無料。	私立校は個人が運営している。そのため、授業料は保護者が負担している。その授業料のみで運営している。 学校によって、授業料は大きく異なる。	基本的には私立校と同じ。しかし、国からの援助を受けている。
教育カリキュラム	国が定めた学習内容を行う。しかし、各学校によってアレンジを加えているため、それぞれの学校で特色がある。		
教員	日本とは違い、公立校においても学校間の移動はあまりしない。教員の給与が低いため、自分の能力を生かして副業をしている人が多い。		
設備等	私立校と比べると設備は良くない。	公立校に比べると設備はいい。しかし、私立校の中でも授業料に大きな差があり、その差は設備にも影響している。	

日本と同じように、公立校と私立校では授業料や設備等の面で大きな差がある。教科書は、日本と違いすべて保護者が購入しなくてはならない。その値段は決して安くはない。昨年、チリでは地下鉄の料金の値上げを発端として、全国中でデモが起こった。その1つの理由に最低賃金の低さがあった。所得格差の問題は、普段の生活はもちろん、子どもたちの教育にも大きく影響している。日本のように義務教育における授業料の無償化を行うことで、その子の特色や能力に合った学校選択ができるようになると良いと思う。

(2) 教育制度について

日本の教育制度は、小学校6年間・中学校3年間・高校3年間・大学4年間+ α である。その内、小学校6年間・中学校3年間の計9年間は義務教育となっている。

チリでは、Básica8年間・Media4年間・Universidad4年間+ α となっている。その内、Básica8年間とMedia4年間の計12年が義務教育となっている。

日本・チリともに義務教育がスタートするのは、7歳になる年からである。また、チリは特別な事情がない限り、Básica8年間・Media4年間の12年間を同じ学校で過ごす。Básicaの下にはKinder(日本の幼稚園の年長) Pre kinder(日本の幼稚園の年中)があり、そこから通っている子どもは、14年間を同じ学校で過ごすことになる。さらに、この14年間1度もクラス替えを行わない学校が多い。クラス替えをしないことには、子ども同士・親同士がお互いの事をよく理解でき、良好な関係を築けることにつながるというメリットがある。実際に現地の保護者は、クラス替えをしないことを喜んでいて、しかし、子ども同士の人間関係が固定されてしまったり、子ども間・保護者間で問題が生じた場合への対処が難しくなってしまうというデメリットもあると思う。子ども同士の人間関係が上手くいかず、保護者が学校にお願いして、クラス替えをしてもらったという事例が過去にあったという。日本のように定期的にクラス替えをすることは、子どもたちがいろいろな人と関係をつくっていくという面でとても良いと思う。

また、チリにおいてはBásica 1年生(日本の小学1年生)から留年制度がある。チリの成績は1~7の7段階である(7が最も優秀)。その中で、年度の終わりに3以下の成績がついているものがあると留年になる(日本と同じように「赤点」という。4は、赤点ぎりぎりのため「むらさき」という)。この留年は、Básico8年間・Medio4年間の計12年間の中で2度しかできず、3度目は学校を退学処分になってしまう。日本でも留年制度はあるが、義務教育段階から留年制度があるというのは、日本よりもシビアだと思う。実際に、Mediaの3・4年生になる頃には、同じクラスに異年齢の子がいるのが当たり前だという。小さいころから、自分のために学習にしっかりと取り組む姿勢をつくっていくということを考えるとこのシステムは、良いと思う。

(3) 一年間の年度の設定の仕方について

日本は、新年度は、4月に始まり、3月に終わる。チリでは、新年度は3月に始まり、12月に終わる。12月から2か月間が長い休みとなる。インターナショナルスクールは少し異なるが、この期間に学校があるのは、チリの中で日本人学校のみであった。長い休みをとることで、家族と過ごす時間が増えることは、とても良いことだと思う。現地の幼稚園や学校の父親参観日などには、ほとんどの父親が仕事の都合をつけて参加する。実際に息子が通っていた幼稚園で父親参観に参加していなかったのは、私だけであった。学校で家族のイベントが行われるときには、ほとんどの両親がそろって参加する。家族をととても大切に一番に考えるというこのチリの考え方は日本も参考にすべきであると思う。しかし、近年、日本同様、チリでも共働きの家庭が増えている。裕福な家庭においては、お手伝いさんを雇うことができるため、子どもの面倒を見てもらうことができる。しかし、そのような家庭はごく一部で、通常の家は家に子どもが1人でいたり、親が職場に連れてきたり、祖父母の家で過ごしたりしている。Sala Cunaと呼ばれる幼稚園と保育園をミックスしたようなところに2・3歳の子どもを預けている親も多い。このような状態では、長期の休みを家族で有意義に過ごすということはできなくなってしまう。子どもの立場から考えると、学校に行って友達と過ごす日が増えた方が良いのかもしれない。

(4) 大学受験の仕組みについて

チリでは、PSU(Prueba de Seleccion Universitaria)という、日本の大学入試共通テストのような全国共通の試験があり、それが大学を受験する上で大切な1つとなることは日本と同様である。チリのPSUの教科は、国語

(スペイン語)・数学・社会(地理・歴史)・物理・化学である。英語については、受験したい大学に応じて、特別必要な人のみ別の試験を受けるということである。日本との大きな相違点は大学ごとの選抜試験がないということである。センター試験の結果とMedia 4年間の成績で大学の合否が決まる。また、大学のどこかの学部を受験するというのではなく、大学を選択し、合格後1年間は共通のことを学び、2年生から専門の分野を選択していくようになる。また、Mediaを卒業後には専門学校に通うという選択肢もある。Mediaを卒業することで専門学校への入学の資格を得ることができる。しかし、大学受験同様Mediaの成績で入れる学校が決まる。専門学校によっては、卒業後大学に編入することもできる。学費については、学校によるが私立大学は、月額40万~50万チリペソ(約8万円くらい)に対して、専門学校はその半額程度である。大学進学に際して、試験だけでなくMedia 4年間の過ごし方がとても大切になる。この制度は、普通の学校生活をしっかりと過ごさなくてははいけないという意識に繋がり、日々の努力が反映されるという面では、とても良いと思う。

3. 算数・数学教育について

(1) 算数・数学の授業時数・内容について

算数・数学の授業時数は、日本では小学校週5時間(小学1年生のみ週4時間)で1時間は45分である。中学校では、1・3年生は週4時間、2年生は週3時間で1時間につき50分で授業を行っている。

チリにおいては、基本的に週3時間である。1時間は90分である。Media 3・4年生(日本の高校2・3年生)においては選択する部分もあるが、1週間に45分授業×3時間は最低行っている。

小学校・中学校ともにチリの方が算数・数学を学習している時間が長い。チリの授業において特徴的なのは、90分授業であるということである。このやり方は算数・数学だけではなく他の教科においても同様である。また、学習内容については、チリも日本と同様に各学年で学習する内容が決まっている。教科書によって学習する順番が異なるということも一緒である。日本の公立校では市町村ごと、私立校では学校ごとに教科書を選択し、使用している。チリは学校ごとに教科書を選択し、使っている。このシステムは、その学校の子どもたちの様子を踏まえた上で教科書を選択して取り組んでいけるので、とても良いと思う。

(2) 日本とチリの算数の教科書について

日本の小学校5年生とチリのBásica 5年生(ともに11歳相当)の学習内容について教科書を使って比較してみた。日本の教科書に比べてチリの教科書は、2倍くらいの厚みがある。チリは、レターサイズくらいの大きさである。

日本とチリどちらも教科書のはじめに教科書の使い方が書かれている。学習する子どもたちを意識して、教科書がつくられている。

また、日本とチリの単元の導入のページではどちらも写真や図、絵などを使って、子どもたちが意欲的に学習を始められるように考えられている。しかし、日本とチリでは、同学年でも学ぶ内容が違う。日本では5年生でない学年で学習する内容がチリのBásica 5年生の教科書にのっている。ここで、どちらにも共通している「図形の合同」の単元について教科書を比較してみた。

日本の場合(東京書籍)は12ページで構成されている。キャラクターを登場させたり、まとめなどを分かりやすく表記したりしている。単元の終わりにはまとめの問題があり、知識や技能の定着を図っている。さらに、補充の問題や発展的な内容もあり、習熟に合わせて取り組めるようになっている。

チリの場合、7ページで構成されている。日本と同様に学んだことをまとめたり、注意点を強調して書いたりしている。合同な図形のかき方の手順を整理しながらまとめてもいる。単元の最後には、知識や技能の定着を図るため、まとめの問題もある。どちらの教科書も図や絵を使いながら、子どもたちが興味・関心をもって学習

に取り組めるような工夫がされている。

4. まとめ

教育制度については、日本とチリでは共通点も多く見られた。それぞれの国で子どもの発達段階を考え、それに合った教育制度を考えている。チリにおける大学受験の仕組みや長い休みの取り方など参考にすべき点もあると思った。また、算数・数学教育についても共通点が見られた。教科書については、どちらの国も子どもが興味関心をもって学習を進めていけるような工夫がされていた。学ぶ子どもを意識して学習内容や課題の提示の仕方を考えることは大切であると再認識した。

日本人学校や海外生活で経験できたこと、学んだことをこれから日本の子どもたちに還元していきたい。